日田市埋蔵文化財調査報告書第68集

一丁田遺跡

２００６年

日田市教育委員会

一丁田遺跡
日田市埋蔵文化財調査報告書第68集
２００６年
日田市教育委員会

序　　文

一丁田遺跡は、天領期に日田の経済の中心として栄え、今なお永山城の城下町としての景観が残る豆田の町並みのすぐ西側、花月川左岸の沖積地でもやや微高地上に位置します。

今回の調査は宅地分譲に伴う狭い調査範囲ではありましたが、弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代後期の住居跡や溝、それに伴う多量の土器類が発見されるなど、貴重な成果を収めることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、これからの文化財の保護や地域の歴史の解明、さらには学術研究等や学校教育資料などにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者の方々、作業に従事いただきました皆様方に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年３月

日田市教育委員会
教育長　諫　山　康　雄

例　　言

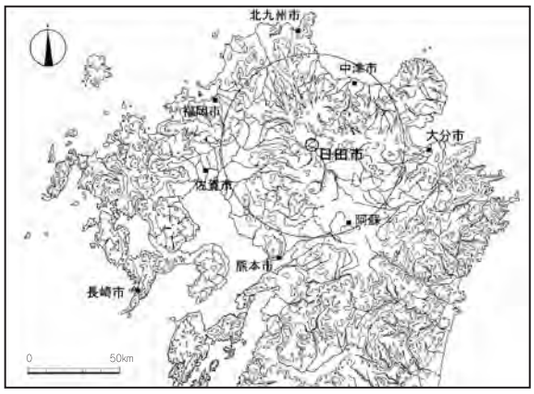
1. 本書は、日田市教育委員会が平成17年度に実施した一丁田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査区一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里跡に含まれるが、今回の発掘調査の結果、条里跡は確認できず、弥生時代～中世の集落遺跡であることが明らかとなったことから、遺跡名称として不適当と判断される。そこで調査終了後、一丁田遺跡として新発見遺跡の登録手続きを行った。
3. 調査は、分譲住宅建設に伴い、有限会社双美工務店の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
4. 調査にあたっては、岩尾信子氏、㈲博井建設、㈲ランドマップのご協力を得た。
5. 調査現場での実測は渡邉・矢羽田、写真撮影は渡邉が行った。
6. 空中写真は㈱九州航空に委託し、その成果品を使用した。
7. 本書に掲載した遺物実測は矢羽田が行い、一部を渡邉、雅企画有限会社の委託によるものを使用した。遺構・遺物の製図は矢羽田のほか、中川照美（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
8. 遺物の写真撮影は、長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
9. 挿図中の方位は全て磁北を示す。
10. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
11. 出土遺物及び図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆・編集はⅡを矢羽田、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳを渡邉が行い、全体の編集は矢羽田が行った。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過と組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録
（1）調査の概要 …… 3
（2）遺構と遺物 …… 3
Ⅳ　まとめ ……16

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図（1/4000）…… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/25000）…… 2
第３図　遺構配置図（1/200）…… 3
第４図　１号住居実測図（1/60）…… 4
第５図　１号住居カマド実測図（1/30）…… 4
第６図　１号住居出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 4
第７図　２号住居実測図（1/60）…… 5
第８図　２号住居出土遺物実測図①（1/4）…… 6
第９図　２号住居出土遺物実測図②（1/4）…… 7
第10図　３号住居実測図（1/60）…… 8
第11図　３号住居出土遺物実測図（1/4）…… 9
第12図　４～６号住居実測図（1/60）……10
第13図　４～６号住居出土遺物実測図（1/4）……10
第14図　１号土坑実測図（1/30）……11
第15図　１号土坑出土遺物実測図（1/4・1/6）……12
第16図　１～３号溝実測図（1/40）……13
第17図　４号溝実測図（1/40）……14
第18図　１号掘立柱建物実測図（1/60）……14
第19図　溝・掘立柱建物・柱穴
出土遺物実測図（1/3・1/4）……15



日田市の位置

図　版　目　次

図版１　上段　調査区遠景（吹上台地を望む）
下段　調査区全景（真上から）
図版２　①　１号住居（南から）
②　２号住居（北西から）
③　２号住居遺物出土状況
④　２号住居遺物出土状況
⑤　３号住居（北西から）
⑥　３号住居遺物出土状況
⑦　４号住居（北から）
⑧　５号住居（北から）
図版３　①　６号住居（南から）
②　１号土坑（南から）
③　１号土坑遺物出土状況
④　１号溝（南西から）
⑤　２号溝（南から）
⑥　３号溝（南から）
⑦　４号溝（東から）
⑧　１号掘立柱建物（西から）
図版４　出土遺物
図版５　出土遺物

本文写真目次

写真１　調査風景
写真２　１号溝土層
写真３　２号溝土層
写真４　３号溝土層
写真５　４号溝土層
写真６　発掘調査に参加された皆さん

表　目　次

第１表　遺構変遷表 …… 16
第２表　出土土器観察表 …… 18
第３表　出土土製品観察表 …… 18

Ⅰ　調査に至る経過と組織

平成17年１月12日付で岩尾信子氏より市教育委員会に日田市港町445-1及び509-1ほかで宅地分譲地造成工事に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である日田条里に該当し、川の対岸には永山布政所跡、月隈横穴墓群などの遺跡が所在し、また花月川の沖積地でも微高地にあたるなど、遺跡の所在する可能性が高いことから、その取り扱いについて協議をいただく旨の文書回答を行った。その後の１月24日には岩尾氏より予備調査依頼が提出され、これを受けて２月14日に機械による試掘調査を行ったところ、445-1の箇所では遺跡の存在は確認出来なかったが、509-1の箇所からは土坑、溝、柱穴などが検出され、弥生土器などの遺物が発見された。

こうした結果をもとに、開発主と遺跡の取り扱いについての協議を重ねたところ、予定地の造成は全面盛土工法にて行われるものの、造成地内に上下水道配管施設を伴う位置指定道路が設置されることから、遺跡の保存は困難であると判断し、農地転用許可後の４月に道路部分約330㎡の発掘調査を実施することとなった。その後、土地転売により事業施主となった有限会社双美工務店と平成17年４月21日に委託契約を取り交わし、４月27日から５月24日の間発掘調査を実施した後、５月17日～６月30日の間整理作業を実施し、報告書作成を行った。調査に関する日誌は以下のとおりである。

４月27日　機械を用いて表土除去、作業員による遺構検出を行う。

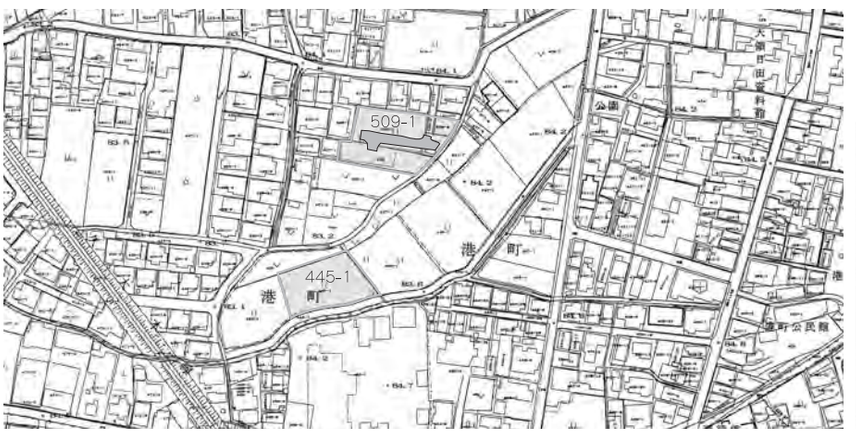
４月28日　住居群、溝の存在が明らかとなり、遺構の掘下げを開始する。

５月23日　遺構の掘下げ、実測作業が完了し、空中写真撮影を行う。

５月24日　機材の片付け・撤収を行い、調査を完了する。

なお、調査組織は次のとおりである。

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　後藤清　（同文化財保護課課長）
調 査 事 務　髙倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、伊藤京子（同専門員）
　　中村邦宏（同主事補）
調 査 担 当　渡邉隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事補）
調　査　員　土居和幸（同副主幹）、今田秀樹（同主任）、行時桂子（同主任）
　　若杉竜太（同主任）
調査作業員　河津定雄、五反田静子、筒井英治、財津利枝、財津由太、高倉富美子、高村三郎
　　原口勝利、平原知義、行村シズエ
整理作業員　鍛治谷節子、平川優子



第１図　調査区位置図（1/4000）

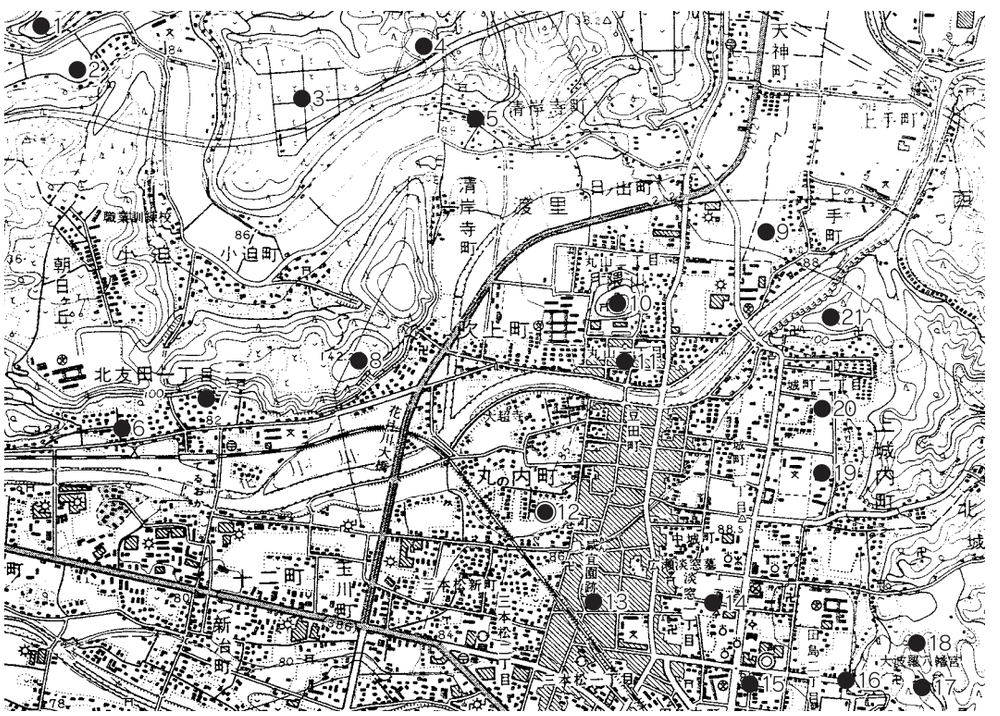
写真１　調査風景

II　遺跡の立地と環境

遺跡は日田盆地のほぼ中央部に位置し、字名の「一丁田」は古代の条里制に由来する地名と言われている。遺跡より南50m程の箇所は、試掘調査の結果から、旧河道であったことが判明しており、本来遺跡周辺は、北側を流れる花月川に挟まれた沖積微高地であったことが窺える。この一帯は、現在住宅が立ち並ぶ状況にあるが、すぐ東側には江戸時代に城下町として栄えた豆田の町並み、北に西国筋郡代所であった永山布政所跡、その背後に月隈横穴墓群、丸山城が造られた月隈山、南に私塾咸宜園跡が所在するなど江戸期の景観が随所に見られる地域でもある。

周辺の遺跡を見てみると、永山布政所跡では古墳時代の溝が、日田条里四反畑地区では古代から近世にかけての土坑や水田層が確認されるなど、これまで治水が悪く、存在しないと考えられてきた沖積地に、近年の調査で遺跡が確認されている。また、慈眼山丘陵周辺には大蔵氏の居城と推定される大蔵古城跡、墨書土器が出土し区画大溝や井戸が確認された慈眼山瀬戸口遺跡、溝や井戸などが確認された上ノ馬場遺跡、中世の建物群が確認された日田条里上手地区などが所在する。大原丘陵周辺には、古墳時代～古代の溝や住居が確認された日田条里飛矢地区、古代の墨書土器が出土した大波羅遺跡、丘陵上には古墳時代の墳墓群が確認された赤迫遺跡、直径35mの大型円墳の薬師堂山古墳が点在する。さらに、西側の吹上台地上には、多彩な副葬品を持つ甕棺墓群や環濠集落が確認された吹上遺跡、台地崖面には北友田横穴墓群、台地の縁辺には弥生後期の住居が確認された今泉遺跡が所在する。北西の辻原台地上には、環濠集落から古墳時代の居館への変遷を知ることができる小迫辻原遺跡、谷を挟んで多数の墳墓群を持つ草場第２遺跡、台地裾部には弥生後期～古墳時代の住居群が確認された本村遺跡などが所在し、さらに奥の宮ノ原台地の端には２基の前方後円墳から構成される朝日天神山古墳群、その眼下には弥生時代終末から古墳時代の集落が確認された尾部田遺跡が所在する。

《参考文献》
田中裕介編　『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書10　大分県教育委員会　1999
土居和幸編　『吹上遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第42集　日田市教育委員会　2003
渡邉隆行　「永山布政所跡2次」『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2004
土居和幸編　『日田条里四反畑地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第46集　日田市教育委員会　2003　　ほか



1　朝日天神山古墳群
2　尾部田遺跡
3　史跡小迫辻原遺跡
4　草場第２遺跡
5　本村遺跡
6　今泉遺跡
7　北友田横穴墓群
8　吹上遺跡
9　日田条里上手地区
10　月隈横穴墓群、丸山城
11　永山布政所跡
12　一丁田遺跡
13　史跡咸宜園跡
14　日田条里四反畑地区
15　日田条里飛矢地区
16　大波羅遺跡
17　薬師堂山古墳
18　赤迫遺跡
19　上ノ馬場遺跡
20　慈眼山瀬戸口遺跡
21　大蔵古城跡

第２図　周辺遺跡分布図（1/25000）

Ⅲ　調査の記録

（1）　調査の概要（第３図）

今回の調査は試掘調査の結果を踏まえて、遺構検出面まで機械で掘り下げを行い遺構の確認を行った。調査区は東西約45ｍ、南北約５ｍの面積約330㎡の範囲で、標高約83.1ｍを測り、ほぼ平坦な地形であった。遺構検出面は現況水田基盤土直下の淡黄褐色・暗黄褐色及び明褐色の砂質土であった。

調査において検出された遺構は住居６軒、土坑１基、溝４条、建物１棟、柱穴多数である。これらの遺構埋土は暗灰褐色土（１～６号住居、１号土坑、２・４号溝）、黒褐色土（調査区中央部柱穴群）、灰色土（２号溝、１号建物）、淡黄褐色土（１号溝）の４種類が見られた。遺構の多くは調査区中央部より西側に集中しており、調査対象地北西側の住宅建設の際に多量の土器が出土したとの周辺住民の証言から、西側への密度の高い遺構の広がりが予測される。

（2）　遺構と遺物

調査区において検出された遺構について説明する。

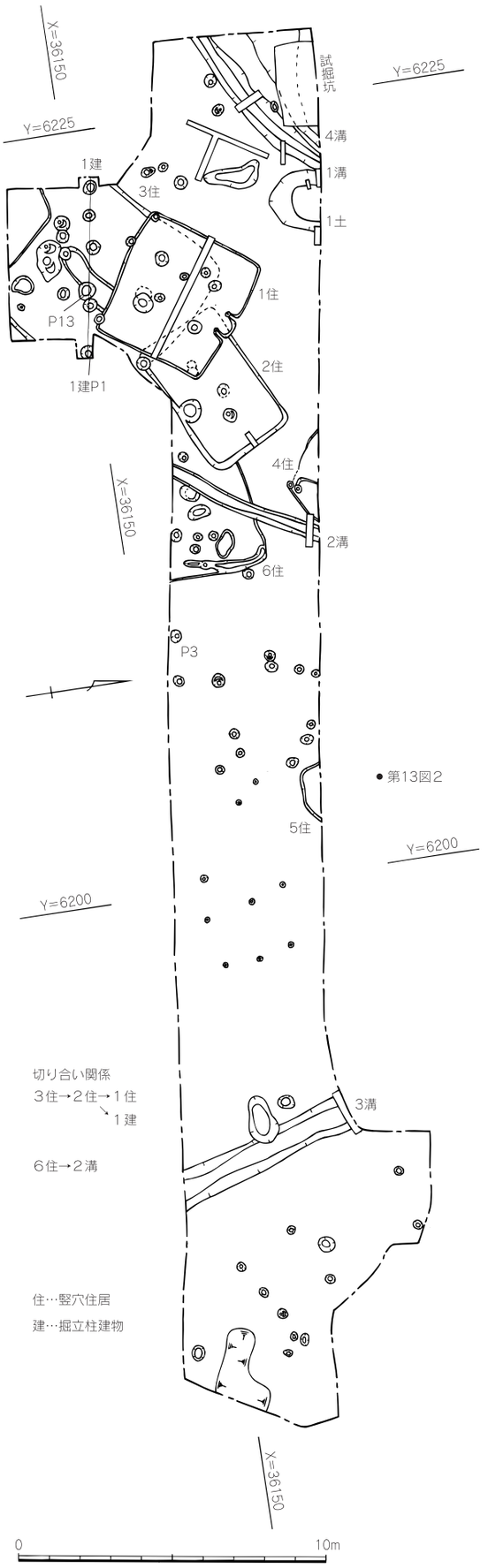
１号住居（第４・５図、図版２）

調査区西側にて検出された住居で、上面の削平が著しく、２・３号住居を切っている。確認面での規模は南北約4.3ｍ、東西約4.3ｍ、深さ約５cmを測り、平面形は方形を呈する。床面は貼床が貼られ、部分的に地山整形であった。深さ約30cmの主柱穴が４穴見られる。

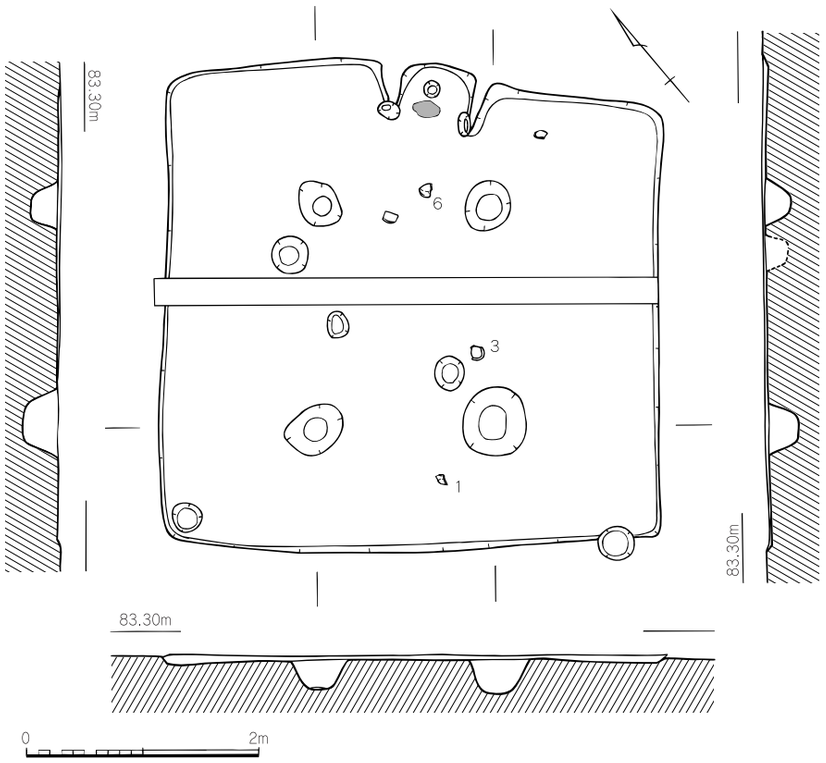
カマドは住居跡北東壁にやや角度がずれて付設される。住居壁より上面を欠くものの、地山作り出しと想定される両袖が一部残存し、袖石、支脚の抜取り痕が確認された。両袖間の距離約50cm、両袖の長さ約50cmを測り、支脚手前部分の熱を受けた箇所が火床面である。

出土遺物（第６図、図版４）

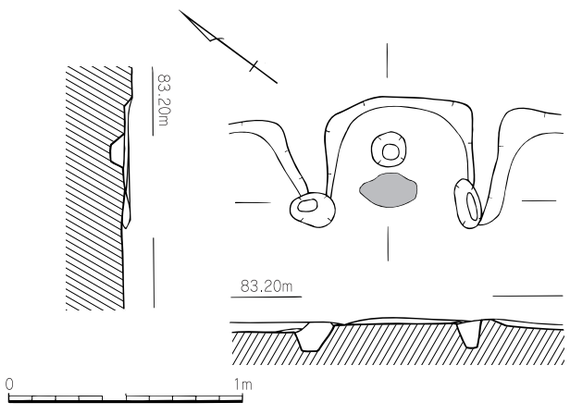
５は２号住居の柱穴から、２・４・11は３号住居及び柱穴から出土している。１号住居が上面に重なっていることから、床面、柱穴の一部掘り残しによる遺物の混入と判断し、１号住居出土遺物として報告する。１・２は須恵器坏蓋である。１は天井部にヘラ記号が残り、２は



第３図　遺構配置図（1/200）



第４図　１号住居実測図（1/60）

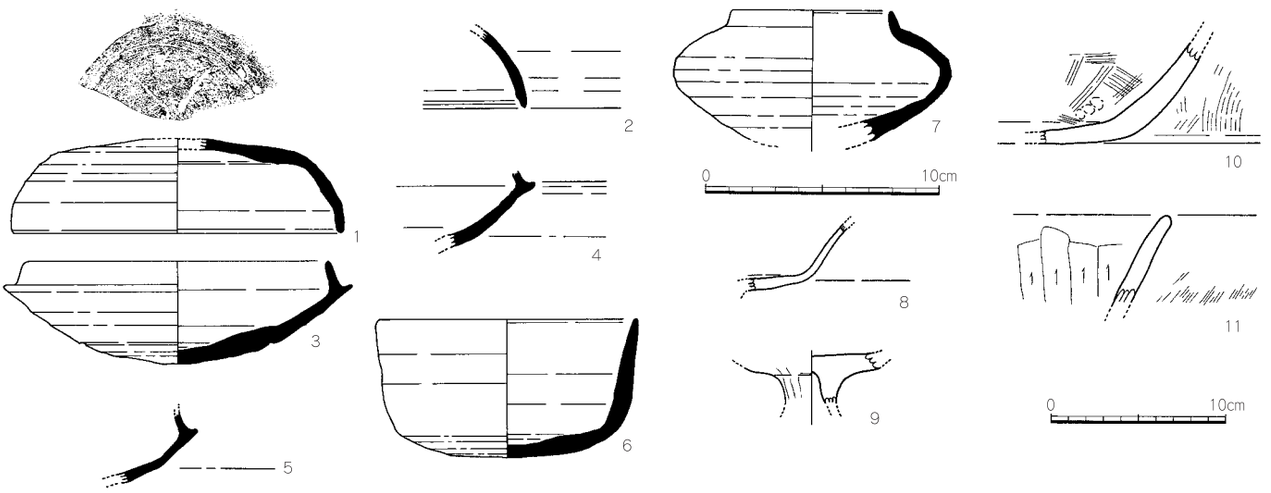


第５図　１号住居カマド実測図（1/30）

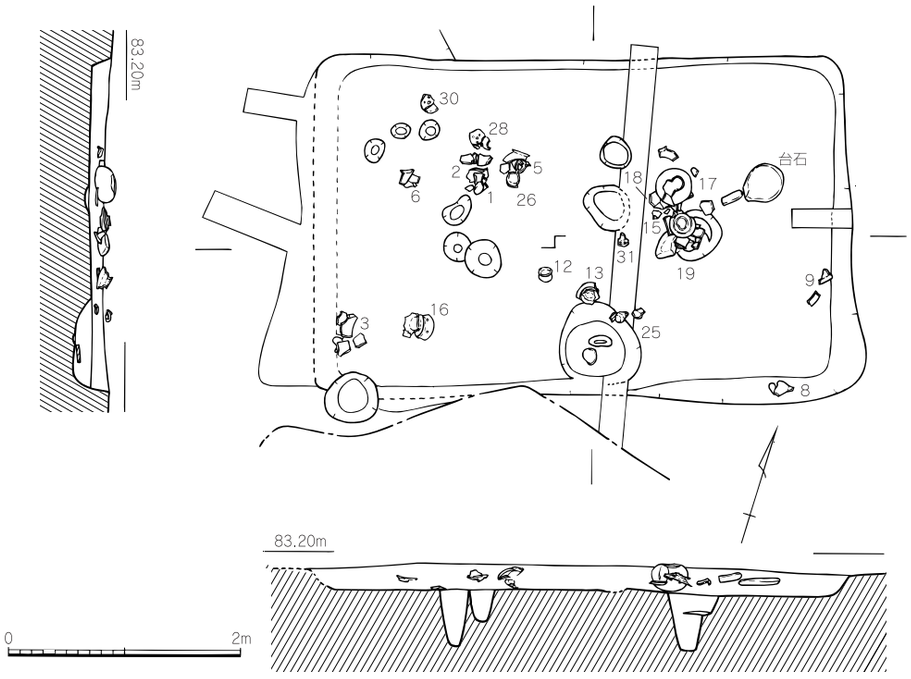
口唇部内面に段を有する。３～５は須恵器坏身である。かえりを持ち口縁部は上方に立ち上がる。４･５は口縁端部を欠く。６は深さのある須恵器坏である。口縁部は直線的に立ち上がる。７は須恵器短頸壺である。胴部上面までヘラケズリが巡る。８は土師器高坏、９は土師器高坏脚部である。10は土師器甕の底部でやや平底気味である。11は土師器甑である。口縁部は大きく外に開き、内面にはケズリが施される。

２号住居（第７図、図版２）

調査区西側にて検出された住居で１号住居に切られ、３号住居を切っている。西側は、当初３号住居との切り合いを把握出来ていなかったため、掘りすぎてしまっている。確認面での規模は東西長軸約4.6m、南北短軸約2.9m、深さ約25cmを測り、平面形は長方形を呈する。床面は地山



第６図　１号住居出土遺物実測図（1/4）※１～７は1/3



第７図　２号住居実測図（1/60）

整形で、南側に南面土坑、中央部に炉跡、深さ約50cmの主柱穴が東西に２穴見られた。炉跡は明確な硬化面が確認出来ないものの、浅い凹みの中に焼土の混じる炭層が確認されたことから、炉跡と判断した。東側には台石が置かれ、住居床面直上の全面に、完形あるいは口縁部のみなどの土器類が、散乱あるいは倒立（12・17）していた。特に東側主柱穴上面に15や19などのほぼ完形の土器類が打ち割られて散乱している状況は、主柱穴抜取り⇒柱穴埋め戻しの後にこれらの土器類を廃棄したことを想定させる。

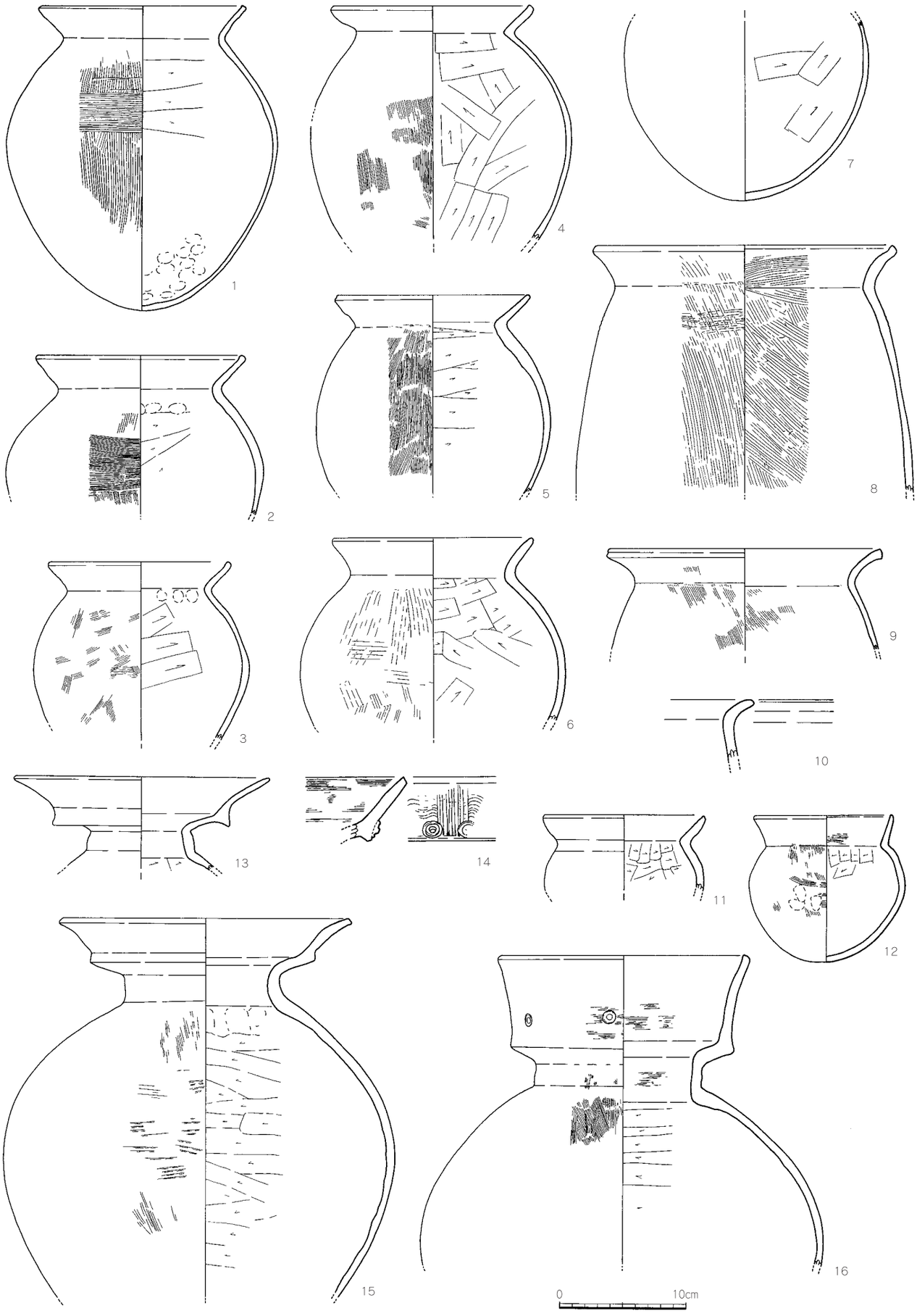
出土遺物（第８・９図、図版４・５）

１～10は土師器甕である。このうち、１～４の口縁部は若干内湾気味に外傾し、端部はややシャープさに欠けるが、上面に突出する。頸部は１～３が口縁部付根の内面直下にもうひとつ稜が形成され、４は鋭い稜をなす。特に１・４の器壁は薄く、胴部はいずれも丸く張り出す。底部は１に残存し、やや尖底気味をなす。内面にはいずれもケズリが施される。５は内湾する口縁部を持ち、口縁部付根の内面直下にもうひとつ稜が形成される。６は口縁部が直線的に立ち上がるものの、頸部の屈曲はシャープさに欠ける。７は若干尖底気味を呈する底部である。８は口縁部が外反し端部をツマミあげる長胴甕で、外面にタタキが残る。９は口縁部が緩やかに外反する甕であり、胴部はあまり張り出さず、外面には縦ハケが残る。10は口縁部が小さく外反する甕である。

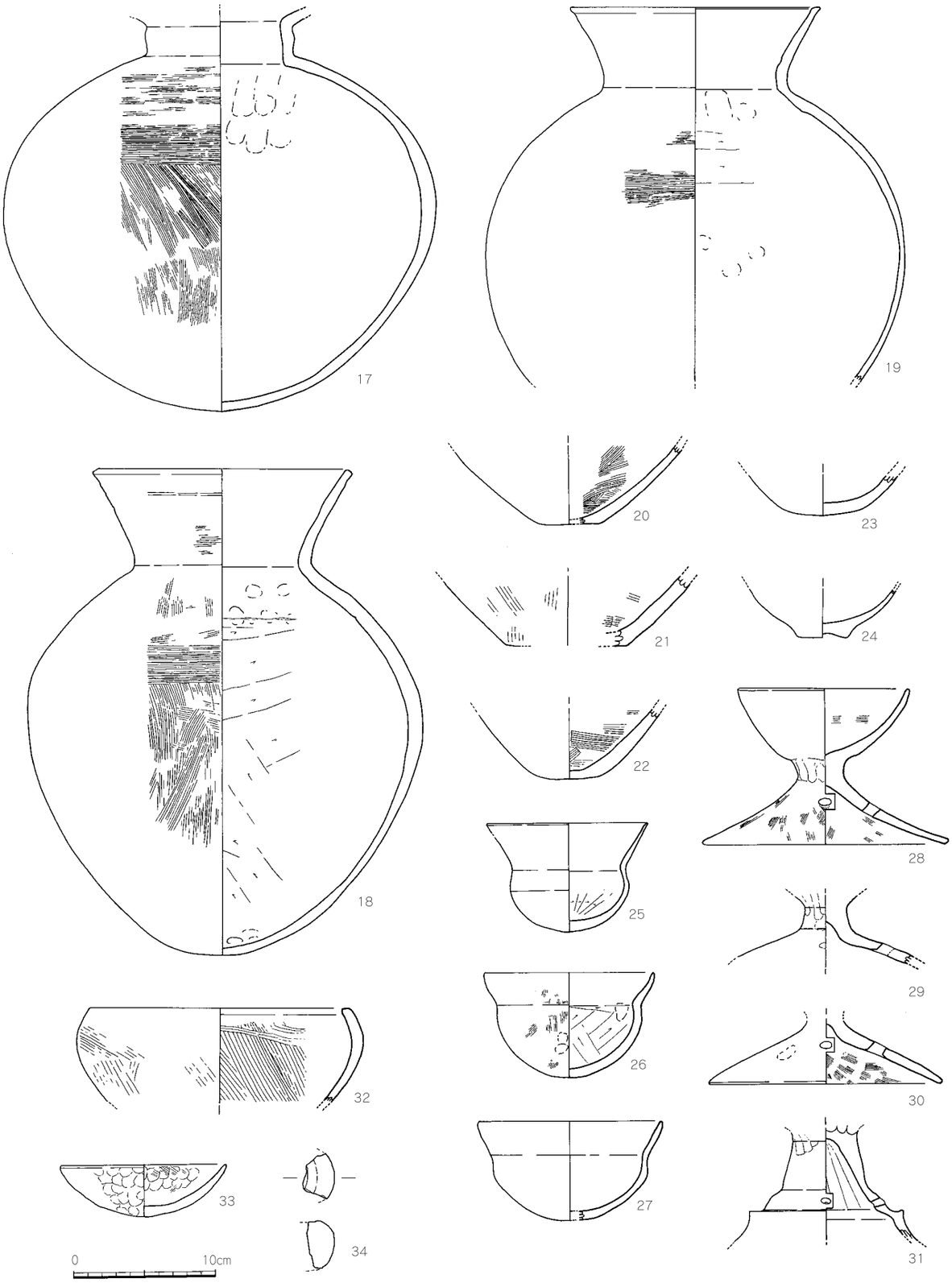
11・12は小形甕あるいは小形丸底壺か。11は若干内湾気味を呈し、12は口縁部が直立する。頸部はケズリによりシャープに作り出される。

13～19は壺である。うち、13～17は二重口縁壺で頸部は筒状を呈する。13～15は口縁部が大きく外に開く。14は口縁部外面に円形浮文が貼りつけられ、ハケを波状に施し、浮文間には縦ハケを施している。16は口縁部が直線的に立ち上がり外反し、擬口縁部上面に竹管文が６穴巡る。17は口縁部形態は不明であるが、残存状況から二重口縁壺と想定される。胴部は大きく張り出す楕円形を呈し、底部は丸底である。18・19は口縁部が直線的に長く開く広口壺である。胴部は張り出す円形を呈し、底部は丸底を呈する。19は端部をやや外に張り出す。

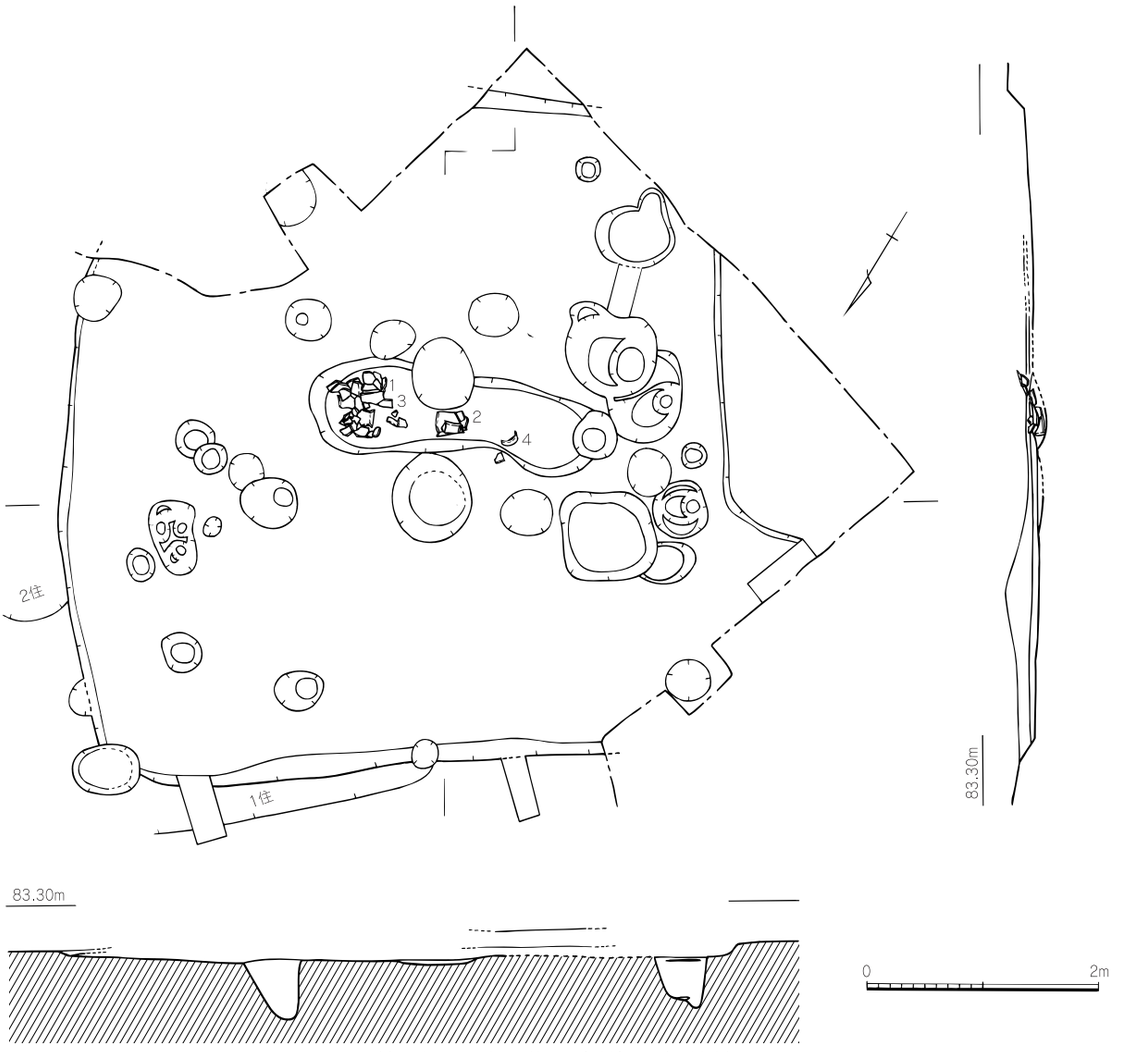
20～24は底部で、20～22はレンズ底を呈し、23は丸底気味、24は底部を作出し、上げ底状を呈する畿内第５様式系か。25～27は小形丸底壺である。口縁部が直線的に長く伸びて外に開く25と口



第８図　２号住居出土遺物実測図①（1/4）



第９図　２号住居出土遺物実測図②（1/4）



第10図　3号住居実測図（1/60）

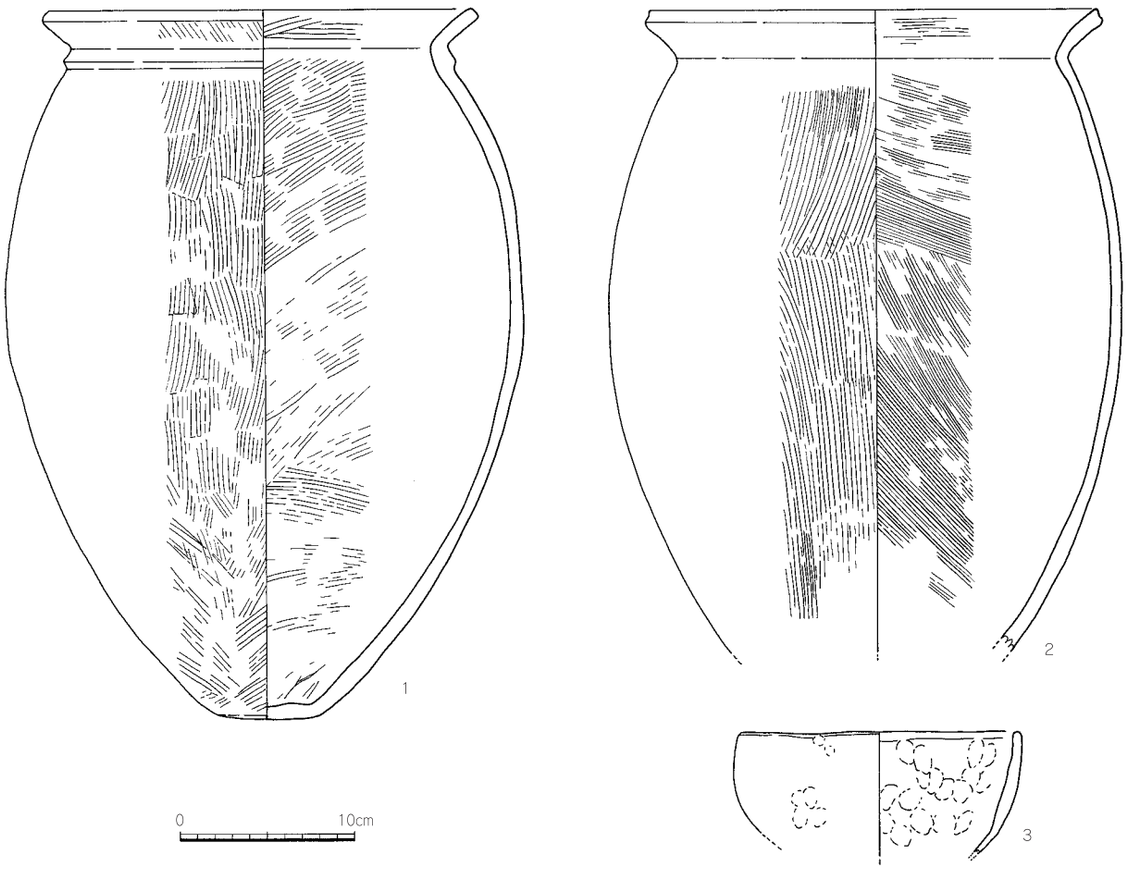
縁部が短く内湾する26・27に区分される。28～30は低脚坏である。28は坏口縁部がなだらかに内湾し、脚部はなだらかに外に開く。穿孔が３穴巡る。29・30は脚柱部が明瞭に作られ、外に開くタイプか。31は脚部に段を有する高坏で、穿孔が施される。32・33は鉢である。32は底が深く、口縁部が内傾する。33は底の浅い器形で、指オサエが全面に残る。34は不明土製品である。土玉か。

１～７、11～15、17～19、24～30は畿内系、16は山陰系、８～10、20～23、32、33は在地系と考えられる。

３号住居（第10図、図版２）

調査区西側隅にて検出された住居で１・２号住居、１号建物に切られる。調査区隅にかかっているためその全体形状は明瞭ではない。調査区内の南隅の段が南東側壁、南東側の段は北西側などの壁面より若干レベルが高いためベッド状遺構と捉えたが、南面土坑は確認できず、炉跡の明瞭な痕跡も確認出来なかった。竪穴状遺構の可能性も考えられる。

確認面での規模は東西長軸約7.3ｍ＋α、南北短軸約5.7ｍ、深さ約15cmを測り、平面形はかなり規模の大きい長方形を呈する。床面は地山整形で、南西側にベッド状遺構を有する。中央部には長楕円形の浅い落ち込みが見られ、ほぼ完形の土器が破損した状態でまとまって廃棄されていた。この落ち込みの北側左右には主柱穴と想定される深さ約50cmの柱穴が２穴見られた。



第11図　3号住居出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第11図、図版５）

１・２は甕で、口縁部がくの字状に屈曲する。１は頸部に断面三角形状の突帯が巡り、胴部はやや張り出し、底部はレンズ底を呈する。２は１とほぼ同様の器形を呈するが、頸部に突帯が巡らない。３は鉢で内外ともに指オサエが明瞭に残存する。

４号住居（第12図、図版２）

調査区西側にて検出された住居で、２号住居に近接する。上面の削平が著しく、不明瞭である。土坑等の可能性もあるが、プランが方形を呈し、やや大きいことなどから住居として報告する。確認面での規模は南北約2.2m＋α、東西約1.4m＋α、深さ約２cmを測り、平面形は方形と想定される。床面は地山整形で、南東側に一段の落ち込みを有し、この箇所より遺物が出土した。

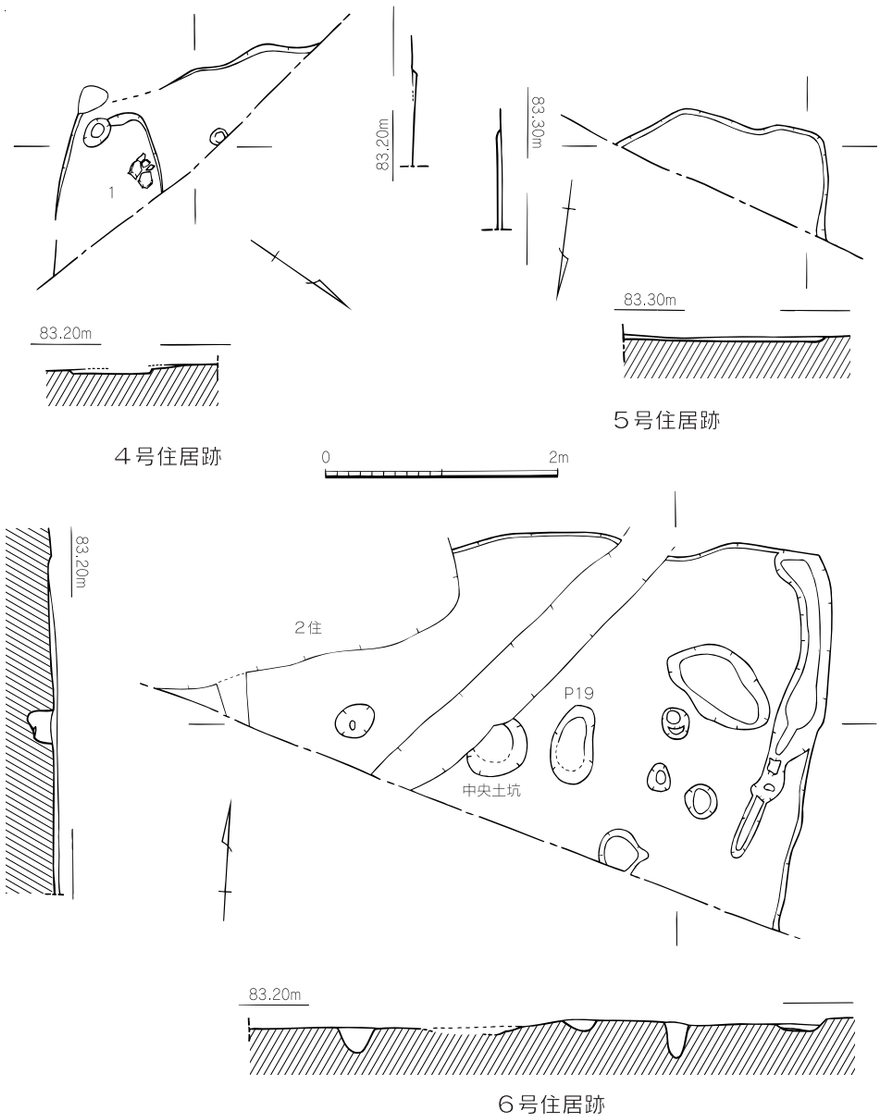
出土遺物（第13図、図版５）

１は甕である。口縁部はくの字に屈曲し、胴部は張り出さず胴部下面にはタタキが施される。

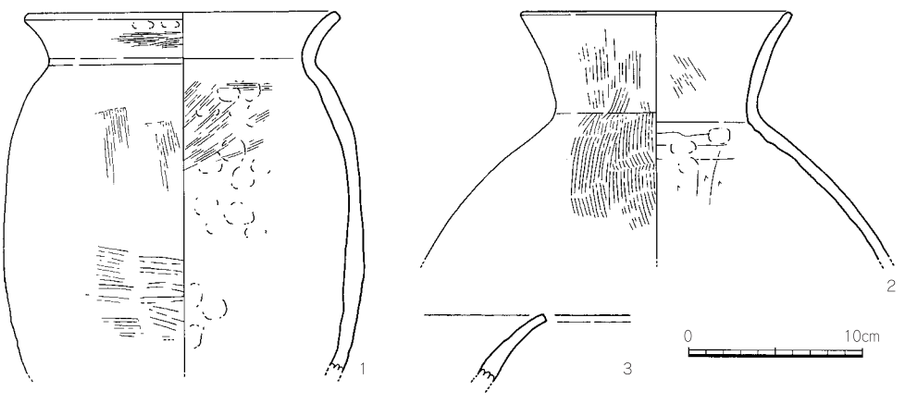
５号住居（第12図、図版２）

調査区中央部にて検出された住居である。上面の削平が著しく、プランは不明瞭である。土坑等の可能性もあるが、方形を呈すること、周辺の基盤土中から土器片が出土していることなどからここでは住居として報告する。確認面での規模は南北約1.0m＋α、東西約1.8m＋α、深さ約３cmを測り、平面形は方形と想定される。床面は地山整形である。

また、この北側約１m程の基盤土中に同一個体のまとまった破片が採集され、この住居に伴う可能性が高いことから出土遺物として報告する。（第３図中表記）



第12図　4～6号住居実測図（1/60）



第13図　4～6号住居出土遺物実測図（1/4）

出土遺物

（第13図、図版５）

２は土師器広口壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、外傾する。外面には縦ハケ、内面にはケズリが施される。

６号住居

（第12図、図版３）

調査区西側にて検出された住居で、２号溝に切られる。上面の削平が著しく、プランが不明瞭であったため、当初は柱穴群として掘下げを実施した。その後、P19が浅く、炭が多く混じることから炉跡、東・北側の若干の段が壁と判断され、住居と想定した。確認面での規模は南北約3.3m＋α、東西約5.8m＋α、深さ約２cmを測り、平面形は方形と想定される。床面は地山整形で、炉跡の東西には深さ約20～30cmの主柱穴が２穴ならぶ。

出土遺物（第13図）

３はP19の炉跡より出土した甕である。口縁部が外反する。

1号土坑

（第14図、図版３）

調査区西側より検出された土坑である。1

号溝が浅いため切り合いは判然としなかった。確認面での規模は南北軸約1.7m＋α、東西軸約2.0m、深さ約10cmを測り、平面形は楕円形を呈する。断面は浅いレンズ状を呈し、中央部に約20cm程の落ち込みが見られる。なお、中央部の落ち込みの底は砂質のため柔らかく、若干掘りすぎてしまった。遺物は概ね２層のなかに多く見られ、3層には若干の破片が見られる程度であった。これらの遺物の多くはほぼ破損状態で、別個体の破片同士が折り重なっていた。数個体の土器を破壊してから一括廃棄したものと考えられる。この廃棄状況や穿孔のある土器の存在などから祭祀行為が想定される。

出土遺物（第15図、図版５）

１～４は弥生土器甕である。口縁部がくの字状に屈曲し、胴部は若干張り出す。底部はレンズ底を呈する。５～７は同一個体と思われる大形の甕である。５は口縁部をくの字状に外反させ、頸部に断面逆台形状の突帯が巡る。６は胴部が若干張り出し、頸部及び胴部下半に断面逆台形状の突帯が巡る。７は底部片で胴部が大きく外に開き、レンズ状底を呈する。８は壺で口縁部が上方に立ち上がり、頸部に刻目突帯が巡る。９は壺あるいは甕で、胴部は張出し、底部はレンズ状を呈する。胴部下半に穿孔が施される。

１号溝（第16図、図版３）

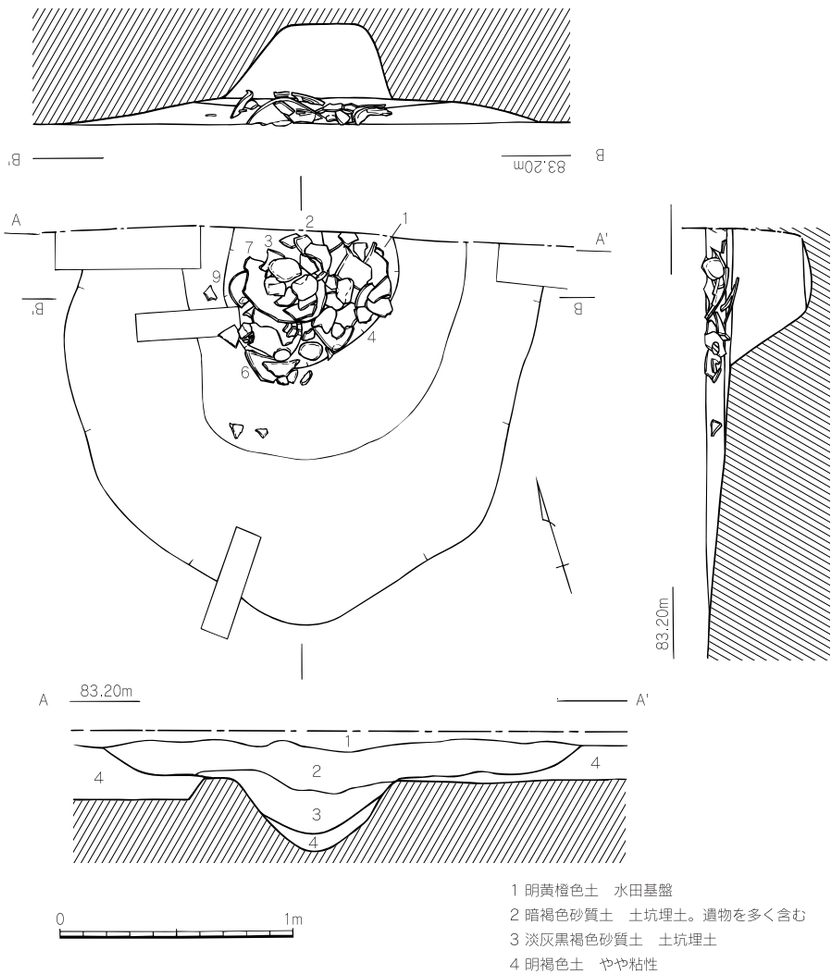
調査区西側で検出された南西から北東方向に伸びる溝である。調査区内での規模は約5.9m、幅は広いところで90cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈し、中央部付近が10cm程度と最も深いが、南西及び北東方向は浅いため、溝の流れは不明である。

出土遺物（第19図）

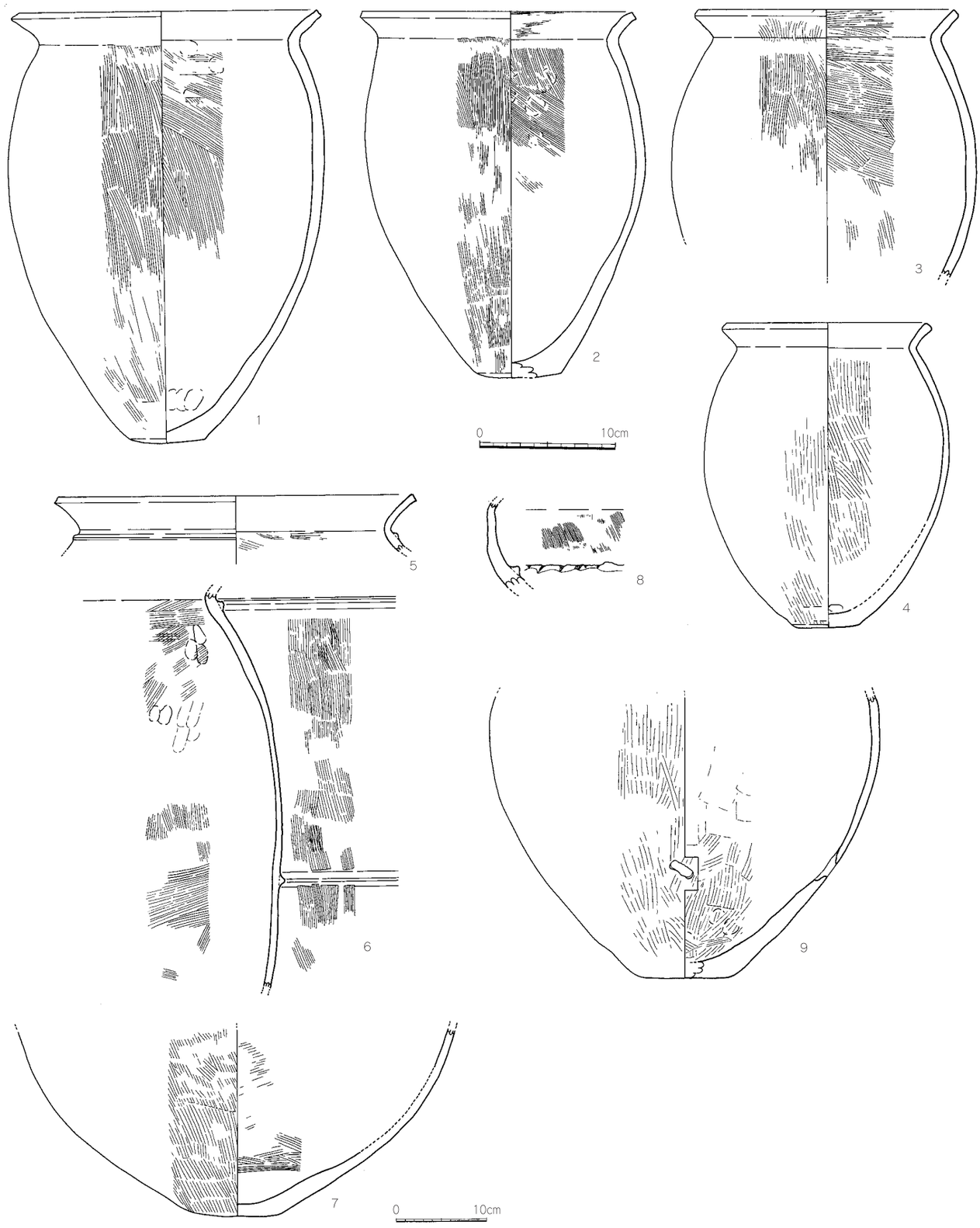
１は弥生土器鉢か。外面にはタタキが残り、内面にはハケが施される。

２号溝（第16図、図版３）

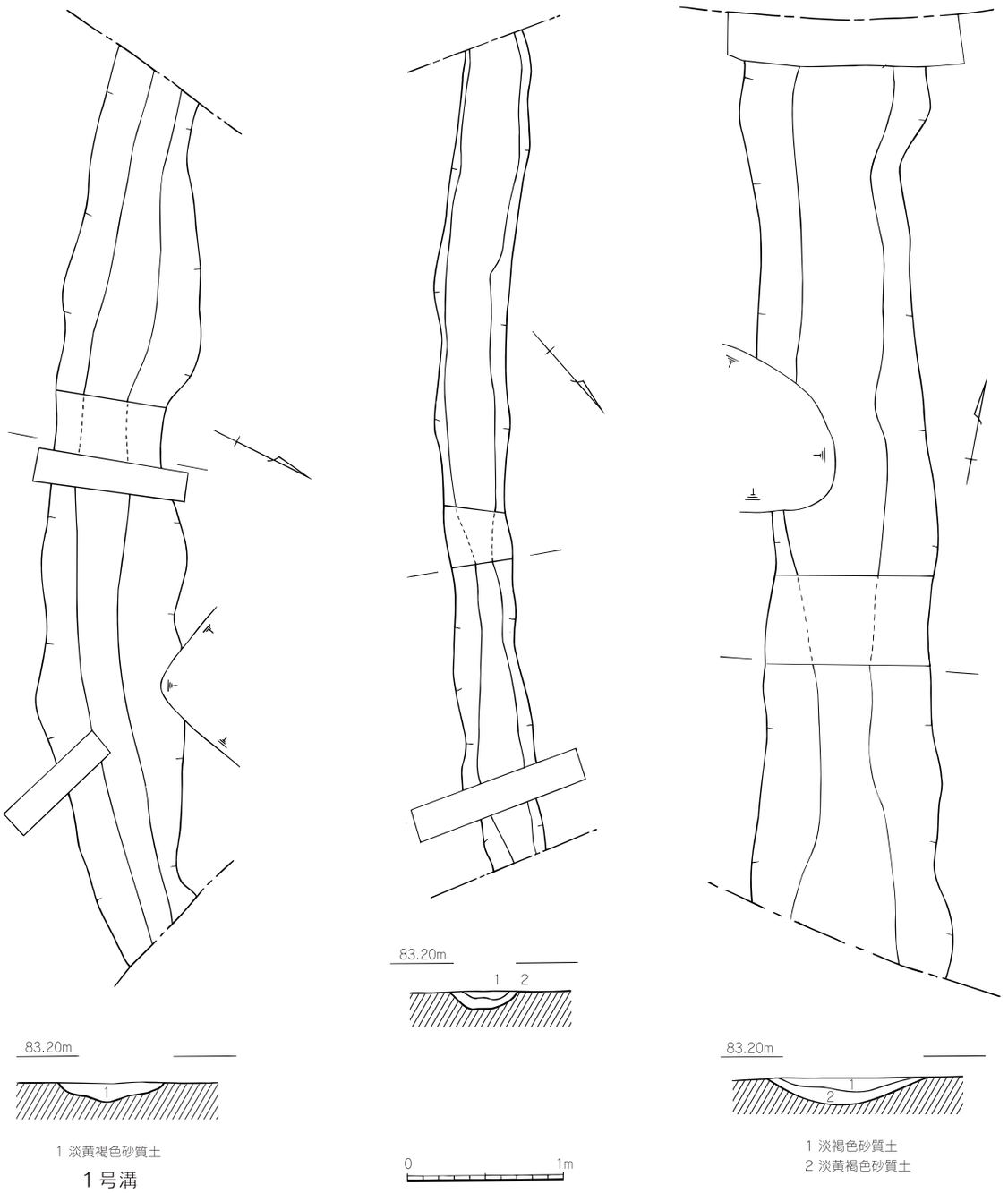
調査区中央部よりやや西側で検出された溝で、６号住居を切っている。南西から北東方向に伸び、調査区内での規模は約5.3m、幅は広いところで50cmを測る。深さは10cm程度で、断面形は浅い逆台形状を呈し、淡灰色土の埋土に鉄分の沈殿が顕著であった。溝床面には鉄分がびっしりと付着していたこ



第14図　１号土坑実測図（1/30）



第15図　１号土坑出土遺物実測図（1/4）※５～７は1/6



第16図　１～３号溝実測図（1/40）

写真２　１号溝土層

写真３　２号溝土層

写真４　３号溝土層

とから、かなりの水流が予測される。床面レベルに差が殆ど見られないため溝の流れは不明である。

出土遺物（第19図）

２は弥生土器片である。器台の底の部分か。３は須恵器甕の破片か。外面には格子目タタキが施され、内面には青海波状のタタキが施される。

３号溝（第16図、図版３）

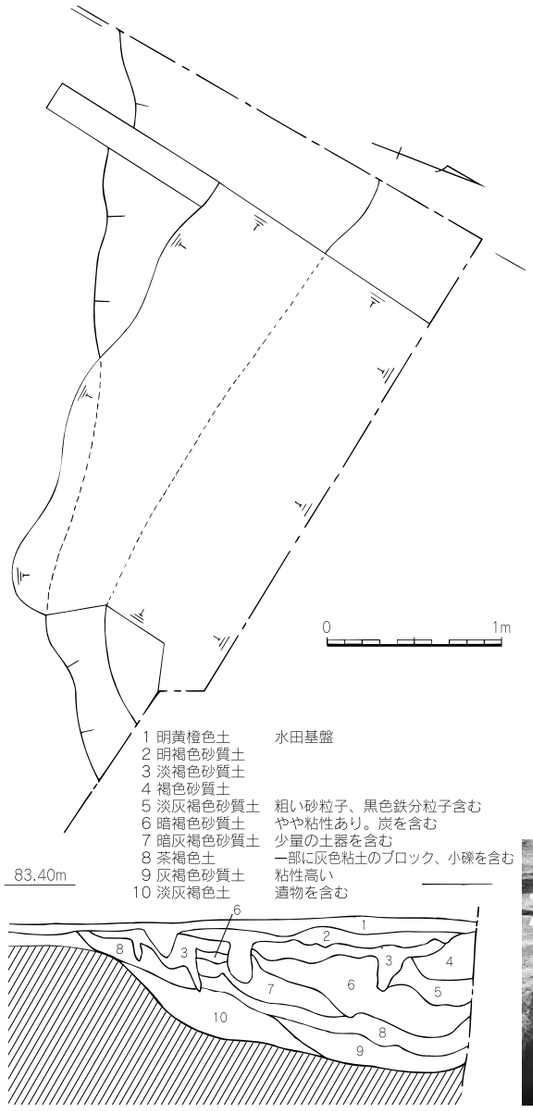
調査区東側で検出された溝である。南北方向に伸び、調査区内での規模は約6.0m、幅は広いところで1.3mを測る。深さは20cm程度で、断面形は浅いレンズ状を呈する。床面レベルに差が殆ど見られないため溝の流れは不明である。

出土遺物（第19図）

４は弥生土器甕の口縁部か。口縁端部を跳ね上げる。

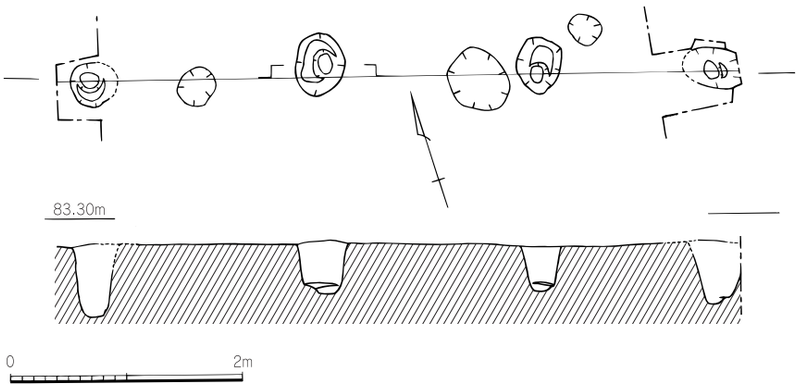
４号溝（第17図、図版３）

調査区西隅で検出された溝で、南西から北東方向に伸びている。試掘調査時に溝内部を掘下げたため大部分が掘りすぎている。調査区内での規模は長軸4.3m、幅は広いところで2.4m＋αを測る。深さは80cm程度で、断面形は逆台形状を呈する。埋土の堆積は互層のブロック状を呈し、２～７層は次第に埋没していった層と考えられる。９層は粘性が高く、水流に伴う沈殿の可能性が考えられ、８層は小礫が含まれることから、９層埋没後の水流を示すものか。この状況から、複数回に渡り埋没と水流を繰り返していたものと考えられる。



第17図　４号溝実測図（1/40）

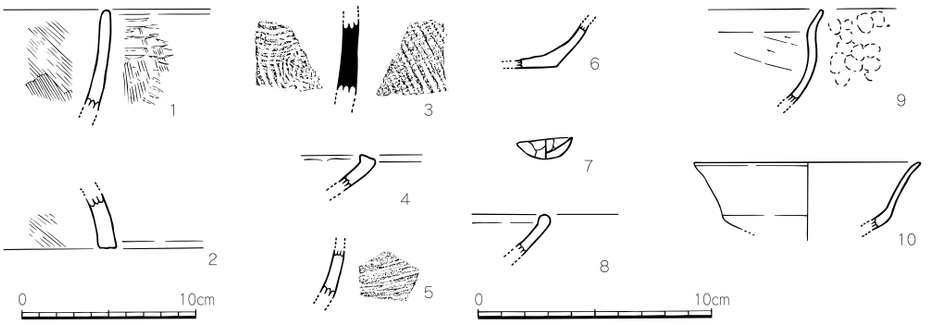
写真５　４号溝土層



第18図　１号掘立柱建物実測図（1/60）

出土遺物（第19図）

５は弥生土器片である。外面にはハケメが施される。



第19図　溝・掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図（1/4）※６～８は1/3

1号掘立柱建物（第18図、図版３）

調査区西側にて検出された建物で、３号住居を切っている。調査区内では４穴が確認でき、南側に展開することが予測される３間＋αの建物である。柱穴間の距離は約1.8mを呈し、深さは約40～60cmを測る。

出土遺物（第19図）

６・７はP1より出土した。６は土師器皿、７は手捏土器である。

柱穴（第３図）

調査区南西隅と中央部に密集しているが、１号建物以外は見られない。特に中央部は黒褐色土の柱穴、南西隅は灰色土の柱穴が多く見られた。

出土遺物（第19図）

８・９はP13より出土した。８は釉の施される磁器片で、碗か。９は小形丸底壺の破片である。10はP3より出土した土師器高坏である。口縁部は緩やかに外反し、坏底部が明瞭に屈曲する。

写真６　発掘調査に参加された皆さん

Ⅳ　まとめ

前章において解説を加えた遺構の時期について述べたうえで、遺構及び遺跡の性格について検討を行う。

３号住居、１号土坑の甕は口縁部がくの字状に屈曲し、頸部に突帯を持ち胴部は張り出さず、底部はレンズ底を呈するなどの特徴を有することから、弥生後期前半～中頃の範疇に収まり、また、１号土坑の大型甕は成人用甕棺墓に使われるサイズのもので、橋口氏の編年Ⅳ期並行(註1)と考えられることから概ね弥生後期前半～中頃と考えられる。

次に、２号住居であるが、特に遺物の出土量が多く、一括廃棄の可能性があることからそのセット関係をもとに時期を検討する。一部の甕に口縁部が直線的で底部が尖底を呈するなどの庄内系の特徴を若干残すものが見られるが、殆どの甕では口縁部が若干の内湾を呈することなどから布留系でも古段階に含まれる。壺は、二重口縁壺に加飾が見られること、広口壺の口縁部が開かず直線的に立ち上がること、小型丸底壺の口縁部が長く外へ開くことなどから、布留系に含まれ、低脚坏は、脚柱部が明確でないものと明確なものが見られることから、庄内系及び布留系のどちらにも含まれよう。以上の各器種の特徴を総括すると、概ね布留式の古い段階に収まり、一部庄内式の特徴を持つ器種が残存する時期と想定される。久住氏のⅡB～C期(註2)、蒲原氏の土師本村1式(註3)に概ね相当すると考えて差し支えないだろう。

また、５号住居からは２号住居と同型式の広口壺が出土している。４･６号住居の甕は在地系で、頸部が不明瞭ながらも、口縁部が長く外に開くなどの特徴から、２号住居の在地系甕とほぼ同型式と考えられる。以上の点から、２･４～６号住居はほぼ同時期と考えて差し支えないだろう。また、１・３・４号溝は遺物の出土量が少ないものの、その特徴や埋土の状況から弥生後期～古墳初頭のいずれかに収まるものと考えられる。

１号住居はカマドを伴うことから、住居の中で最も新しい。出土した須恵器坏蓋の口縁端部に段が残り、口径もやや大きく14cm程度となる。また、須恵器坏が出土する状況などと併せても、概ねTK43期(註4)の範疇に収まり、土師器類についても重藤氏の９期(註5)の特徴を有している。また、P３より出土した遺物も同時期に比定され、この柱穴と同色埋土の調査区中央部の柱穴群は１号住居と同時期に想定してよいものと考える。

次に１号掘立柱建物は破片資料ではあるが、ヘラ切りの土師器坏が出土しており、２号溝からは須恵器が出土していることから、少なくとも古代以降に想定される。しかし、埋土の類似するP13より出土した陶磁器片の存在から、これらの遺構は中世期の範疇に収まるものと想定される。

さて、以上のような時期比定をもとに、遺構の変遷を整理すると、概ね表１のようになり、これらは切り合いから把握できた前後関係とも齟齬はない。

この時期比定から、弥生後期～古墳初頭にかけて最も集落規模が大きく、数軒の住居群、土坑、溝などが作られ、その後間をおいて古墳時代後期、中世に再び集落として利用される状況が見て取れるが、遺構数も少ない状況から、比較的規模の小さい集落の可能性が考えられる。

第１表　遺構変遷表

時　　期	遺　　構	
弥生時代後期	3号住居、1号土坑	1、3、4号溝
古墳時代初頭	2、4～6号住居	
古墳時代後期	1号住居、柱穴群	
中　　世	1号掘立柱建物、2号溝	

さて、この複数期の集落群のうち、最も注目されるのが弥生後期～古墳初頭の時期である。調査区より北西約900mの吹上台地上には、弥生前期後半～後期の

拠点集落である吹上遺跡(註6)が所在し、その縁辺部には今泉遺跡(註7)や本村遺跡(註8)などの後期集落の存在が確認されている。また、環濠から環溝居館へと至る過程が見て取れる小迫辻原遺跡(註9)の所在する台地縁辺部には、弥生終末から古墳初頭に該当する本村遺跡や尾部田遺跡(註10)などが見られる。近年の調査から、吹上遺跡や小迫辻原遺跡の台地縁辺に集落が広がっていたことが明らかとなりつつあるが、今回の発掘調査結果は、台地縁辺だけではなく、沖積地の微高地上にも同時期の集落が部分的に広がっていたことを物語っている。また、古墳時代初頭の２・５号住居から畿内系の遺物が出土していることも注目される。畿内系遺物は先述の小迫辻原遺跡に多数見られ、その縁辺部にあたる尾部田遺跡でも畿内系遺物の出土が確認されている。今回の調査結果から、畿内系遺物の受容が、拠点的集落のみならず、周辺の小規模集落においても同様に行われていたものと想定される。

そのほか、古墳時代後期後半の住居の存在は、調査区より北東約700mの花月川対岸に位置する月隈横穴墓群(註11)との関係が想定される。これまで、この横穴墓周辺に集落の存在が知られていなかったが、近年の永山布政所跡(註12)の調査で、古墳時代後期の溝跡が確認されており、本遺跡の調査結果と併せて考えると、横穴墓群眼下の沖積地に、当該期の集落が広がっていたことが窺い知れる。今後の調査の進展が期待される。

以上のように、本遺跡の調査結果は、これまで明らかでなかった沖積微高地上の弥生時代～中世の集落の存在を示し、吹上遺跡、小迫辻原遺跡、月隈横穴墓といった大規模な集落や墳墓群とその周辺集落の在り方を理解するうえで貴重な資料を提供していると言える。

追記

平成18年１月22日、埋蔵文化財係長を務められた田中伸幸氏が永眠された。見た目も中身も大きな方で、担当者が発掘調査や報告書作成で疲れているときには必ず優しい言葉で励ましてくださる、尊敬すべき係長であった。１年３ヶ月もの闘病生活を余儀なくされたが病魔には勝てず、享年47才という若さで旅立たれた。生前のご指導に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

註1）橋口達也　「Ⅳ4　甕棺の編年的研究」　『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＸＩ中巻　福岡県教育委員会　1979

註2）久住猛雄　「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ＸＩＸ　庄内式土器研究会　1999

註3）蒲原宏行　「古墳時代初頭前後の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集　佐賀県立博物館・佐賀県立美術館　1991

註4）田辺昭三　「陶邑古窯址群Ｉ」平安学園考古学クラブ　1966

註5）重藤輝行　「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡Ｉ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集　福岡県教育委員会　2000

註6）土居和幸　『吹上遺跡Ｉ』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第42集　日田市教育委員会　2003

下村　智　『吹上遺跡Ⅱ』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第52集　日田市教育委員会　2004

土居和幸　『吹上遺跡Ⅲ』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第57集　日田市教育委員会　2005

永田裕久・土居和幸　『吹上遺跡』－6次調査概要―日田市教育委員会　1995

註7）渡邉隆行　『今泉遺跡』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第37集　日田市教育委員会　2002

註8）若杉竜太　『本村遺跡』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第51集　日田市教育委員会　2004

註9）田中祐介　『小迫辻原遺跡Ｉ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10　大分県教育委員会1999

土居和幸　『小迫辻原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第15集　日田市教育委員会　2000

『居館の里　小迫辻原遺跡』日田市教育委員会　1993

土居和幸・小田富士雄　「最古の居館　小迫辻原遺跡」『風土記の考古学4　豊後国風土記の巻』　同成社　1995

註10）行時志郎　『尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集　2001

註11）「第三章古墳時代」『日田市史』日田市　1990

註12）渡邉隆行　「永山布政所跡2次」『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2004

第２表　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第６図1	1住	須恵器	坏蓋	(14.0)	－	－	(4.0)	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ不定方向ナデ	BC	良好	青灰色	青灰色	ヘラ記号
第６図2	1住	須恵器	坏蓋	－	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	CF	良好	灰色	灰色	
第６図3	1住	須恵器	坏身	(12.0)	－	(1.1)	4.4	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ不定方向ナデ	BC	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第６図4	1住	須恵器	坏身	－	－	－	－	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	BC	良好	青灰色	青灰色	
第６図5	1住	須恵器	坏身	－	－	－	－	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	C	良好	灰白色	灰白色	
第６図6	1住	須恵器	坏	(11.2)	－	(2.0)	5.9	回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ不定方向ナデ	BC	良好	灰白色	灰白色	
第６図7	1住	須恵器	短頸壺	(6.8)	－	－	－	回転ヘラケズリ回転ナデ		BCF	良好	青灰色	青灰色	
第６図8	1住	土師器	高坏	－	－	－	－	ケズリ？	ケズリ？	BC	良好	橙色	橙色	
第６図9	1住	土師器	高坏	－	－	－	－	ナデ、ケズリ	ケズリ	ABC	良好	橙色	にぶい橙色	
第６図10	1住	土師器	甕	－	－	－	－	ハケ	ハケ	ABCD	良好	赤褐色	にぶい橙色	
第６図11	1住	土師器	甑	－	－	－	－	ハケ、ナデ	ナデ、ケズリ	ABCDEG	良好	淡黄色	淡黄色	
第８図1	2住	土師器	甕	15.5	－	－	24.1	ハケ、ナデ	ナデ、ケズリ、ユビオサエ	ACE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	外面スス付着
第８図2	2住	土師器	甕	16.1	－	－	－	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ、ユビオサエ	ACE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図3	2住	土師器	甕	14.2	－	－	－	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ、ユビオサエ	ABCD	良好	淡黄色	淡黄色	
第８図4	2住	土師器	甕	15.6	－	－	－	ハケ、ナデ	ナデ、ケズリ	ABCDE	良好	淡黄色	淡黄色	
第８図5	2住	土師器	甕	15.0	－	－	－	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ	ACE	良好	にぶい橙色	灰黄褐色	
第８図6	2住	土師器	甕	(15.8)	－	－	－	ハケ、ナデ、ケズリ？	ケズリ、ナデ	ABCDEH	良好	にぶい橙色	灰白色	
第８図7	2住	土師器	甕	－	－	(1.5)	－	ナデ	ケズリ、ナデ	ABCDEH	良好	にぶい黄色	黄褐色	
第８図8	2住	土師器	甕	(23.3)	－	－	－	ハケ、ナデ、タタキ	ハケ、ユビオサエ	ABCDE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図9	2住	土師器	甕	(21.6)	－	－	－	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ABCDE	良好	淡黄橙色	淡黄色	
第８図10	2住	土師器	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	BC	良好	橙色	にぶい橙色	
第８図11	2住	土師器	壺	(12.6)	－	－	－	ヘラケズリ、ナデ	ナデ	ABC	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図12	2住	土師器	壺	12.5	－	0.9	11.5	ケズリ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ABCDE	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
第８図13	2住	土師器	壺	(20.2)	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ	ABCDE	良好	淡黄色	淡黄色	
第８図14	2住	土師器	壺	－	－	－	－	ハケ、ナデ、円形浮文	ハケ	ABC	良好	浅黄橙色	灰橙褐色	
第８図15	2住	土師器	壺	22.5	－	－	－	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ、ユビオサエ	ACE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図16	2住	土師器	壺	19.2	－	－	－	ハケ、ナデ、竹管文	ナデ、ユビオサエ、ケズリ	ACD	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図17	2住	土師器	壺	－	－	(30.4)	－	ハケ、ナデ	ナデ、ユビオサエ	ACE	良好	にぶい黄橙色	灰褐色	
第８図18	2住	土師器	壺	(17.6)	－	－	34.3	ハケ、ナデ	ケズリ、ナデ、ユビオサエ	ACE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図19	2住	土師器	壺	17.5	－	－	－	ハケ	ナデ、ケズリ、ユビオサエ	ABCE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図20	2住	土師器	甕	－	－	(4.2)	－	ケズリ？	ハケ	ABCD	良好	黒褐色	にぶい赤褐色	
第８図21	2住	土師器	甕	－	－	(8.2)	－	ハケ	ハケ	ABCDH	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
第８図22	2住	土師器	甕	－	－	(1.2)	－	ケズリ？	ハケ	ABCDE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第８図23	2住	土師器	甕	－	－	(1.4)	－	ハケ、ナデ	ハケ	ABCD	良好	にぶい橙色	にぶい褐色	
第８図24	2住	土師器	甕	－	－	(3.4)	－	ナデ	ナデ	BCEGH	やや良好	橙色	橙色	
第８図25	2住	土師器	小形丸底壺	11.4	－	0.6	7.7	ナデ	ケズリ、ナデ	ABCE	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
第８図26	2住	土師器	小形丸底壺	(12.0)	－	－	7.4	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ナデ	ABCE	良好	浅黄橙色	黒褐色	
第８図27	2住	土師器	小形丸底壺	(13.0)	－	(2.2)	(7.0)	ケズリ?ナデ	ケズリ?ナデ	ACD	やや良好	灰白色	灰白色	
第８図28	2住	土師器	低脚坏	12.1	－	17.4	11.1	ハケ、ケズリ	ナデ、ハケ	ABCDF	良好	灰白色	灰白色	
第８図29	2住	土師器	低脚坏	－	－	－	－	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	ABCD	良好	灰白色	灰白色	
第８図30	2住	土師器	低脚坏	－	－	16.5	－	ハケ、ナデ、ケズリ	ナデ	ACD	良好	灰白色	灰白色	
第８図31	2住	土師器	高坏	－	－	－	－	ケズリ、ナデ	ケズリ、ナデ	ACDE	良好	灰白色	灰白色	
第８図32	2住	土師器	鉢	(18.4)	－	－	－	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ABCD	良好	浅黄色	浅黄色	
第８図33	2住	土師器	鉢	11.6	－	－	3.7	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ハケ、ナデ	ACE	良好	灰黄色	灰白色	
第11図1	3住	弥生	甕	24.3	－	(5.6)	40.5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ACE	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第11図2	3住	弥生	甕	(25.6)	－	－	－	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	ABG	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第11図3	3住	弥生	鉢	16.0	－	－	－	ナデ、ユビオサエ	ユビオサエ	ABCD	良好	淡黄色	淡黄色	
第13図1	4住	土師器	甕	(17.6)	－	－	－	ハケ、ナデ、タタキ、ユビオサエ	ナデ、ハケ？、ユビオサエ	ACH	良好	浅黄色	浅黄色	外面スス付着
第13図2	5住	土師器	壺	(15.2)	－	－	－	ハケ、ナデ	ハケ、ケズリ、ユビオサエ、ナデ	AE	良好	にぶい黄橙色	にぶい褐色	
第13図3	6住	土師器	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDF	良好	橙色	にぶい橙色	
第15図1	1土	弥生	甕	21.9	－	5.7	22.0	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ABCE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第15図2	1土	弥生	甕	19.8	－	－	(27.1)	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ACE	良好	にぶい黄橙色	黒褐色	
第15図3	1土	弥生	甕	18.8	－	－	－	ハケ、ナデ	ハケ	ACH	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第15図4	1土	弥生	甕	(14.6)	－	5.0	22.5	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ABCDE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第15図5	1土	弥生	甕	(39.0)	－	－	－	ナデ	ナデ?ハケ	ABCF	良好	淡黄色	淡黄色	同一個体
第15図6	1土	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ABCD	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	同一個体
第15図7	1土	弥生	甕	－	－	(9.6)	－	ハケ	ハケ、ナデ	ACDE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	同一個体
第15図8	1土	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ、ナデ	ナデ	ABCDE	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	刻目突帯
第15図9	1土	弥生	甕	－	－	(7.4)	－	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	ACE	良好	橙色	橙色	穿孔
第19図1	1溝	弥生	鉢	－	－	－	－	タタキ、ハケ	ハケ	ABCE	良好	橙色	浅黄橙色	
第19図2	2溝	弥生	器台	－	－	－	－	ナデ	ハケ、ナデ	ABC	良好	橙色	にぶい橙色	
第19図3	2溝	須恵器	甕	－	－	－	－	タタキ？	タタキ？	C	良好	青灰色	青灰色	
第19図4	3溝	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCD	良好	淡黄色	淡黄色	
第19図5	4溝	弥生	甕	－	－	－	－	ヘラ状工具によるナデ	ナデ	ABC	良好	黒褐色	浅黄色	
第19図6	1建P1	土師器	皿	－	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	ACD	良好	橙色	橙色	底部ヘラ切り
第19図7	1建P1	土師器	手捏土器	(2.3)	－	－	(1.1)	ユビオサエ	ユビオサエ	B	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
第19図8	P13	青磁	碗	－	－	－	－	釉	釉	C?	良好	灰オリーブ色	灰オリーブ色	
第19図9	P13	土師器	壺	－	－	－	－	ユビオサエ	ナデ	ABC	良好	明黄橙色	明黄橙色	
第19図10	P3	土師器	高坏	(13.0)	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	ABC	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	

法量の単位はcm。（　）書きは、残存と復原を表す。
胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ赤色粒子　Ｅ白色粒子　Ｆ黒色粒子　Ｇ雲母　Ｈ砂粒

第３表　出土土製品観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量			調整		胎土	焼成	色調		備考
				高さ	巾	厚さ	外面	内面			外面	内面	
第８図34	2住	土製品	土玉？	－	－	－	ナデ	不明	AC	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	

調査区遠景（吹上台地を望む）

調査区全景（真上から）

写真図版２

①１号住居（南から）

②２号住居（北西から）

③２号住居遺物出土状況

④２号住居遺物出土状況

⑤３号住居（北西から）

⑥３号住居遺物出土状況

⑦４号住居（北から）

⑧５号住居（北から）

①６号住居（南から）

②１号土坑（南から）

③１号土坑遺物出土状況

④１号溝（南西から）

⑤２号溝（南から）

⑥３号溝（南から）

⑦４号溝（東から）

⑧１号掘立柱建物（西から）

写真図版４

6-1

6-3

6-6

6-7

8-1

8-2

8-3

8-4

8-5

8-6

8-8

8-12

8-13

8-14

8-15

8-16

9-17

9-18

9-19

9-25

9-26

9-28

9-30

9-33

11-1

11-2

11-3

13-1

13-2

15-1

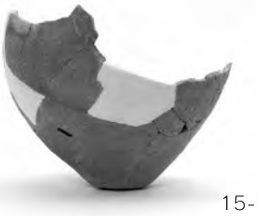
15-2

15-3

15-4

15-6

15-7


15-9

報　告　書　抄　録

ふりがな	いっちょうだいせき
書名	一丁田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第68集
編著者名	渡邉　隆行・矢羽田　幸宏
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
一丁田遺跡	大分県日田市 大字南豆田 字一丁田 506番地 ほか	44204-6	651044	33°19′32″	130°56′0″	20050427 ～ 20050524	330㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一丁田遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居６軒、 溝４条、 土坑１基、 柱穴 多数	弥生土器 土師器 須恵器	

一　丁　田　遺　跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第68集
2006年３月31日

編　集　日田市教育委員会文化財保護課
877-0077　大分県日田市南友田町516-1

発　行　日田市教育委員会
877-8601　大分県日田市田島2-6-1

印　刷　(有)中央印刷
877-0012　大分県日田市淡窓２丁目3-1